〈小説〉優秀賞

コスモス

栗原　知子

ロングシートに座る乗客のほとんどが、進行方向の景色が見えるよう斜めに腰かけているから、人の心って面白い。車窓の外に秋晴れの空が広がっている。十一月。とうに刈り取られた田の周りで、野の草花が揺れていた。

平日昼の小湊鉄道に乗っている人の数は、両手の指で足りるほど。車両内の揺れがのどかな伴奏となって、何とはない一体感が生まれている、そんな雰囲気がある。

「こうやって見ているススキやコスモスや、セイタカアワダチソウ。同じ風景を孝標の娘も見ていたと思うと、感慨深いよね」

窓の外を眺めていたミオが言う。私は遠慮もなく、笑ってしまった。

「セイタカアワダチソウは外来種だと思う。たぶん、コスモスもそう」

「そうなの？　コスモス、外来種？」

「たしかそう」

「前言撤回。さっきのなし」

悪びれないミオのようすに、また笑ってしまう。

アメリカ西海岸の街に住む彼女から帰国の知らせが入ったのは、数週間前のことだった。チャットアプリ上のやりとりで、滞在中にぜひ会いたいと言われて気がはやる。

ミオの言葉は、いつも率直で無駄がない。

――仕事の休みは何曜日？

私もすぐに返信する。

――日曜と木曜　私立だから土曜にも授業があって、そのかわりに平日の休みがあるの

私は日本画家として作品を発表しながら、講師として高校の美術を教えてもいる。相談のあとで、十一月半ばの木曜に会うことが決まった。

――場所はどうしようか　どこか行きたいとこある？

尋ねられて「どこでもいいよ」と返したものの、それではそっけなかったかなと思い直した。以前二人でよく出かけたのは、映画館。古書街。それから美術館。ＳＮＳで情報が流れてきて、気になっていた場所がある。

――湖畔美術館っていうのがあって、そこはいつか行ってみたかった

いったんブラウザを開き、公式サイトへのリンクを貼り付ける。少しおいて返信がある。

――市原？　何かどこかで聞いた感じ　いいよ　そこにしよ

数日後「わかった、更級日記で旅がはじまる辺りだ！」というメッセージが届き、いつだって思いのまま、周囲に風を呼んでいるようなミオのふるまいが懐かしくなって、頬がゆるんだ。

文学部日本文学科。ミオと出会ったのは、私が美術を志すよりもずっと前、四年制大学の教室でのことだった。二年になって履修した「更級日記を読む」のゼミに、私たちはいた。

「それぞれに段を割り振って、毎回一人ずつレポート発表をしてもらうけど、順番と割り当て方はどうしますか。というか、どう。みんな、更級日記、一回は読んでる？」

初回の講義で、若い助教の先生がそう言った。遠慮がちに皆が顔を見合わせたとき、すらりと長い手を挙げたのがミオだった。

「はい！　先生！　私、竹芝伝説やりたいです」

たけしばなに？　これ、更級日記のゼミだけど？　混乱したのは私だけではなかったと思う。視線を泳がせる学生たちの前で、先生だけは「おっ」と言った。

「じゃあ他に同じところをやりたい人がいなければ、『たけしば』の段はえーと、C組の松島さんね。他には？」

結局私を含めた残りの学生は、出席番号順におもだった段を割り振られたのだった。

「小旅行だね」

車窓に寄りかかるような姿勢のまま、ミオが言う。

朝早く、都内で待ち合わせをして下りのJR線に乗り、内房線の駅でこの小さな列車に乗りついだのだ。

ある興味から、私は質問を思いつく。

「小旅行、って英語でなんていうの」

「excursion.」

「なるほど。発音さすが」

あの頃、いっしょに「コミュニケーション英語Ⅱ」の単位を落としたこともあったのに。

目的の駅で降りて地図アプリを頼りに歩きはじめると、すぐに湖畔美術館の看板が見つかった。本当に、この先に湖がある？と、半信半疑で小暗い坂道を登っていく。びし、びし、歩道に落ちているドングリが、足もとで乾いた音を立てる。下りになった道の先、次第に視界が開けて、想像していたよりもずっと広い湖が姿を現した。

「いいねいいね！」

久しぶりの開放感に、体が喜んでいる感じ。

対岸に渡るための橋がある。走行する車に追い抜かれながら、長い長い歩道を行くのだろう。目を引くのは湖の中央部に設置されている巨大なオブジェで、何かの虫を象（かたど）ったような形態。美

術作品と見える。
　広大な風景を前に、ミオは不安そうな顔をした。
「あれ、歩いて行くの？　けっこうかからない？」
「ここから十五分っていう話だけど」
　トイレの心配でもしているのかと思ったら、違った。
「ちょっと、そこのお蕎麦屋で食べてから行こうよ。私たぶん、お腹が空いてると集中して展示を見られない」
「いいよ。お昼まで、まだまだ時間があるけどね」
「一日三食っていうのは、人類の思い込みかもしれないよ？」
　私たちのあげる笑い声が、晴天の空をさらに押し広げていく。

　食事のあと。橋の半ば、湖面から突き出るオブジェを右手に見ながら、私たちは歩いている。
「月の晦日（みそか）はお蕎麦の日」。のれんの形をした小さなタペストリーが壁にかかっているような、昔ながらのお蕎麦屋さんだった。美味しい手打ちをいただいて、私たちの足取りも軽い。
「それでね、少し前に流行ってたエモいという言葉が、私はぴったりだと思うんだよね」
　学生時代の思い出話が続いたあと、ゼミで学んだ「更級日記」の談義をしていた。
　ミオの言葉に返す。
「エモいって、中高校生が使ってた感じだけどね」
　自分自身ではアウトプットしなかった単語だ。三十歳を目前にした今、生徒たちが流行らせるような言葉は、もう気軽には使えない。
　そうなの？　と言ってミオは続けた。
「案外、言い換えが効かないと思うけどな。情緒的。エモーショナル。読めば心が動いてことばを失くすような力が、竹芝伝説にはあると思うんだよ。何回でも有効な、スイッチのような」
　その語りに相槌を打ちながら、頭の中で更級日記の概要をなぞっている。
　作者の菅原孝標女は、執筆時には五十を過ぎた年齢。国府の娘として過ごした上総を去る場面から、日記ははじまる。上京して物語に熱中した娘時代、それから結婚と子育てを経て、夫を亡くし寂しく過ごす晩年までを、いきいきとした筆致で描いている。
　竹芝伝説は、少女だった孝標の娘が道すがら立ち寄った寺で聞いた物語だった。都に任官する衛士の若者が、宮中で庭掃除しながら独り言で故郷を懐かしむと、たまたま御簾の中でそれを聞いていた内親王がいたく興味を持ち、その故郷を見せるように命じて自分を武蔵の国に連れ去らせる、という挿話。ちょっと変わった恋愛物語だ。
「あれさ、男がへんなことを言うよね。仕事しながら」
「そう」ミオは力強く肯定した。「あのつぶやきがいいんだよ。故郷では酒壺を並べたところに瓢箪で作ったひしゃくを浮かべて、そのひしゃくが、南風が吹けば北になびき、北風が吹けば南になびき……っていう」
「そうそれ！」懐かしさに、今度は私が前のめりになる。「その独り言のどこに惹かれたのかが、よくわからなかったんだよ」

「意味なんかないところがよかったんじゃない。愚痴めいたことを言いながら働いている男の、おかしみっていうの。物腰とか、鷹揚さとか」
「字を追うだけではわからない何かが、あったのかな。でもね、宮中での暮らしを捨ててまで？　って、あの頃思ってた」
「直感が働いたんじゃない。もしかしたら、もともと気にかかる存在だったのかもしれないし。男もお姫様を背負って逃げながら、追手を留まらせるために橋を壊すなんて、なかなか機転もきいたみたいだし。そのあと男の故郷で幸せに暮らしているし」
　そんなことあるのか、と、学生だった私は思ったものだった。
「不自由のない都の生活を送っていた人が、東国に走って後悔もしないなんて」
　私が言うのを聞いて、ミオは笑う。
「そうとう、奇特なお姫様だよね」
「奇特さゆえの、ハッピーエンドということね。たしかにそこは、小気味よかったな」
「そう。意外性にあふれていて、何回読んでも新しい」
　新しい、という言葉の余韻を味わいながら、湖の風景を見渡す。あちらこちらに釣り船が出ている。岸の近くには、白鳥のボートがいくつも浮かんでいる。湖の風景は、私の目に新しい。つまり、わくわくする。
　ミオも遠くに目を向けながら語る。
「孝標の娘が竹芝伝説を書き遺してくれて、本当によかった。それに更級日記に書かれた、がちゃがちゃした一生も好き。物語に熱を上げたと思ったら、そのあと仏道修行に転向したり。ときめきのない結婚にぼやいたり、中年期、夫でない人に憧れたり。それでも夫を亡くしたときには、前後もないくらいに悲しんだり」
「なかなか忙しい人生なんだよね」
　孝標の娘の手によるのではと言われる文学作品は他にもあるけれど、更級日記自体はけっこう短い。そして小粒でも、無二の輝きを放っている。娘時代から数十年を経て書かれたとは思えない描写力といい、日記に書かれる事柄の取捨選択といい、自由闊達で読むほどに惹きつけられるというのが、大学で学んだ頃の印象。
　ミオも何事か考えていたようすのあと、言った。
「人の一生は短くても、書いたものは永遠だね」それから、私に向かって聞いた。「絵は、どう？」
　再会の決まったときから予想はしていた質問なのに、やっぱり一瞬とまどってしまう。
「絵はね、ときどき個展をやってる。半年に一回とか。あとグループ展もときどき」
　すごいじゃない、とミオは目を輝かせる。
「それって、販売するの？」
「するの。だから職場には兼業の申請をして、やっているんだけどね」
「学校長の許可がいるんだ」
「そうそう」
　二人とも大学卒業後は企業に就職したけれど、私は一年あまり

で辞め、やりたかった日本画を学ぶために美大へ入り直した。そうして卒業後に高校教師の職に就いたので、国語と美術、二つ持っている教員免許のうち、一つは役立っていることになる。

「知らない誰かの部屋に、自分の絵が飾られてるってことでしょう。それってどんな気分」

「うれしい反面、本当は、自分で持っていたいかな」

「なんでなんで？　思い入れ？」

「うん。ポートフォリオって言って、作品の写真は撮るけれど、実物とはやっぱり違うもの」

なるほど、そういうものなんだ、とミオは納得してくれたけれど、私は全く心境を語れていなかった。

プライマリー、というのは画廊に展示した作品を、こちらの付けた価格で販売すること。そうして買われた絵がオークションなどで購入者に値を付けられる場が、セカンダリーと呼ばれるマーケットになる。コンテストでの受賞歴が増えるうち、金融商品として絵を求めるのだろう人もあらわれて、そのはじめの頃に忘れがたい失敗をした。

その場で受ける質問の性質から、飾って愛することを目的にしているのか、画家の成長の先で生まれる利益を求めているのかは、だいたいわかる。あの日、名刺に記された肩書を見るまでもなく、後者のケースだということはすぐに察した。が、バイヤーの少し横柄な態度への困惑から、ついつい私の口角も下がっていった。

運が悪かったというべきか。自分にとってのターニングポイントとも言えるような、特別な作品でもあった。相手がギャラリーの担当者の前でブリーフケースから契約書を取り出したその瞬間、たまらなくなった。「すみません」自分の発する言葉に、自分がショックを受けていた。「ごめんなさい、やっぱりこの絵は売れません」

利益を折半するギャラリー側にとっても、十数万円の売上げが泡と消えた瞬間だった。ビジネスの場に立つものとして、あるまじきことをしたと思う。申し訳なさと情けなさとでうなだれて、契約書を鞄に戻したその人がどんなふうに去っていったか、覚えていない。

経験不足と言えばそれまでだけれど。岩絵具の定着について答えているときに発言の誤りを指摘されたときよりも、バイヤーからストーカーまがいの付きまといを受けたときよりも、土壇場で販売を取り下げたあの経験のほうが、今でも辛い。あれほどの不義理をして、そのギャラリーのみならず他の画廊からもオファーが来なくなるのではと落ち込んだけれど、そんなこともなく、ただただ甘かった自分への内省だけが続いている。

結局私は、絵で何をしたいのか。

漠然とした迷いをひきずったまま、どこか制作に積極的になれなくなっている。久しぶりの再会をことほぐべき日にそんな話をすることは、格好悪いだろうか。

暗い想念は、ミオの声に打ち消された。

「着いたね！」

スマートフォンの画面で見ていたモダンな美術館が、美しい姿

を現した。

「かみがつくる宇宙」。開催中にぜひ訪れたいと思っていた企画展だ。三人の女性作家による展示作品を、私たちはゆっくり鑑賞した。いずれも紙を素材にして制作された、折り紙。彫刻。そして切り絵。最後の展示室で圧倒的な切り絵作品を目の当たりにしたとき、私は言葉を失った。

壁面には、繊細に切り抜かれた和紙と墨とで表現された、平面作品が並ぶ。その白とグレーの陰影の中になにか得体の知れないものが宿っているような気がして、見つめたまま、絵の前からしばらく動くことができない。

部屋の中央には大きな立体作品が吊るされている。レースのように、泡沫（ほうまつ）のように切り抜かれた紙が水平に層をなし、光の中で輝いている。雲のようだ……と見上げる私の心を、「詩情」、「憧れ」、「啓示」、「印象」、さまざまな言葉がよぎっては消えていく。

絵具だって和音だって調味料だって、混ぜれば混ぜるほど濁るものなのに、概念は混じりあうとこのように昇華していくのだと、はじめて知った。

私の隣りで、

「これはもう、」

と言いかけたまま、ミオもまた言葉を継げずにいる。

美術館の屋上に、初冬の太陽が薄い光を投げかけている。

エントランスに置かれたオブジェからはじまり、館内のそこかしこに恒久展示作品が置かれていた。この屋上には透きとおった細長いチューブが数百、林立している。

「このコンクリートの剥がれまで、作品に見えてくるなあ」

足もとの灰色を指しながら、ミオが言った。それは私にも覚えのあることだった。

「私も現代美術の展示を見たあと、何を見ても美術作品に見えることがある。休憩用のベンチや壁についたコンセントまで、作品かと思って見返しちゃう」

感覚が開かれると、いろんなものが意味ありげに見えてくる。額縁やキャプションパネルというのもまた、ちょっとした通知みたいなもので……。何かつかみかけたようで、やっぱり考えがまとまらない。

ミオがつぶやいた。

「作品と作品でないものに、さかい目はないってことかもね」

作品と作品でないもの。たとえば、大きな樹みたいに。

陽光に向かってさしだされる一枚の葉のように、一枚の絵が存在するとしたら。文化という大樹の一隅で光を集め、自らはあずかり知らぬどこかの枝の結実を、たすけることになりはしないか。

ドーサ液をひいたあとの和紙に筆を下ろして、輪郭を描きだしていく、あの手ごたえが胸によみがえる。私はおそるおそる言葉にした。

「切り絵の、紙と墨との作品があったでしょう」

「あったね」

「私も墨で何かしたくなったな」ゆっくりと、言葉をつかまえた。「白と黒の陰影の中に行間が広がっているような、感じがしたんだよ」

私もそれを追いたくなったから。

ミオはしばらく思案して、こう言った。

「それってたぶん、孝標の娘も感じていたよ」

え？　と聞き返した私に、ミオは答えた。

「真っ白な紙って、昔は手に入りにくかったはずだよね。小さな頃から物語の世界に憧れた孝標の娘にとって、それは文化の象徴だったかもしれない。筆をとって紙に向かうとき、憧れていた源氏の全巻をようやく手に入れて読んだとき、それから歳をとって日記をものしたときにも、孝標の娘はずっとどきどきしていたんじゃないかと思う」

「あ……」

千年前に生きた一人の女性。本名も知らない彼女と、もしかしたら語り合える、そういう思いにとらわれる。

そして私の知っている、もう一人の女性。

学生時代、クラスの仲間が集まった飲み会で、なぜ文学部に入ったのかという話題になったことがあった。就職活動が本格的に始まった頃だと思う。文系女子、とくに文学部卒は就職に弱いと、皆がひしひし実感しはじめる頃だった。

ある人は、高校に来た指定校推薦の枠が余っていたからと言った。またある人は、付属高校から内部進学するときに、評定平均からおのずと決まったと言った。私は、本当は美大に行きたかったけど親には言いにくかったし、と打ち明けた。

そのとき開いていたメニューから顔を上げ、懐かしそうに言ったのがミオだった。

「私はね。文学部しか受けてない。こことも一校受けて、こっち受かったから本当に嬉しかったな」

あの瞬間、私は思い出したのだった。図書室で禅画の画集を眺めながら、線と余白とが生み出す印象の中をいつまでも潜航していられた、高校時代の放課後を。

ミオに出会っていなかったら、私はきっと、美大で学び直す勇気を持てなかった。

第一講義棟の、中庭に面した明るい演習室。二年生のときのゼミでミオが「竹芝伝説」についての発表をした日、くすくす笑いをこらえながらレポートを聞き、最後にはその完成度を誉めた助教が、彼女のパートナーとなった人。今はアメリカの大学に長期で招聘されている。

私たちが出会ってから、十年。

「はしるはしる、わづかに見つゝ、心も得ず心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず、几帳の内にうち臥してひき出でつゝ見る心地、后の位も何にかはせむ」

更級日記の、広く知られているくだり。ようやく全巻を手に入れた源氏物語に孝標の娘が胸おどらせ、誰にも邪魔されずに読書に没頭すれば、妃の位も欲しくはないほどに心満たされていると

いう場面。
人生にダイブし続けたような孝標の娘の、その息づかいにいま、背中を押されている。
言葉と言葉の、そのあわい。私は私の行間をつかまえにいこう。

屋上で吸う空気が清冽で、私たちは写真を撮ったりしながら、しばらくの時間を過ごした。
「あ」
ミオが見ている場所に視線をうつすと、そこにはイトトンボが一匹、惑っているのだった。丈高い透明なチューブを草と間違えたのか、なめらかな表面に足を掛けては滑り、掛けては滑り、ついには諦めてその場を離れていく。
「きれいだね」
ミオが言った。
「うん」トンボのことなのか、トンボが飛んで行った先の風景のことなのか、わからないまま私は同意する。頭上を覆う青空を見上げ、それから言う。「小旅行というか、小宇宙だったね」
「だね」
私はまた、質問を投げた。
「小宇宙は英語でなんていうの」
「microcosmos.」
「マイクロなに?」
「コスモス」
「スペースとか、ユニバースじゃないんだ」
「スペースは、大気圏の外の宇宙空間。スペースシップとか」
「なるほど」
「ユニバースは、地球も含めた包括的な宇宙、かな。で、コスモスは……、ちょっと難しい。おのずから調和している、宇宙のありさま? というかんじ」
「調和」
四方で揺れる秋の草と、野焼きの香りと、澄みきった空と。今日この場所で享受しているものが、それだったと気づく。

美術館を出て、復路の乗り換え検索をする。そこではじめて、次に乗車できるのが二時間後だと知った。
「二時間!」
意表をつかれた気分で、ひとしきり笑う。二人ともが、上りの時刻表を把握していなかった。
「ミオ、いつも効率重視で乗り換えするタイプだったよね。アメリカに住んでから変わったの?」
「ないない。今日はなぜだか調べなかった」
私も同じだった。もとより一時間に一本の列車と思って覚悟していたので、利便性についてははなから諦めていたらしい。
「結果、焦らず展示を見られたからよかったかな」
「かもね」
ミオは、周辺エリアの情報を検索しはじめた。
「カフェあり、神社あり。そこに見えているおしゃれなピザ屋も

気になるな」
「まずは、湖の周りを少し歩いてみようか」
今日の一日はまだ十分に残っている。私たちは歩を合わせ、光のにぎわう水辺のほうへと降りていった。